

5月の詩

令和7年5月朔日から末日

桜人 心都悩

ア
ブ
サ
ン

レースカーテン越しの女が微笑む
パリスグリーンドレス
人を惑わす白フリル

盲目の花香

死と誘惑の円舞曲

依存と願望の手を取って

ここが楽園、墮落の園

眩しき朝日に身を貫かれる槍

クライゲラヒ

二十年、胸に秘めし女の激情に似たり
その芳醇な香をり

口にするまで隠したることいじらし

ひとたび煽れば鼻腔の貫くを感じ

色鮮やかなること種々酔う様の果実の如し

二十年、胸に秘めし女の激情に似たり

天使に涙を分け与えれば

アルコール消えて穏やかな優しさが現れる

けれども芯なる苦味は変わらず

願わくは恋情残滓の絶えぬことを

困
憊

鞆の中の栄養瓶が

電信柱にぶつかって

カーンと一つ音を鳴らす

電信柱の空洞に響く空気の振動と
体の空腹に響く絶望の振動と

グー、カーン、グー

瓶の中身を飲み干して

それきり私の足は動かなくなった

○×ゲーム

私の町に大きな方眼紙を置いて

○×ゲームを始めましょう

真ん中に大きな○を描いて

あの場所には嫌いな人がいるので×を書く

家に帰りたくないの×を書く

二人でいるよりみんなでいる方が寂しい

だからあっちこちに×を書く

今日も一人カラオケボックスに

ひとつつ小さな○を書く

部屋の出口から見えたあの町明かりの
どれもに私はいないのです

夜桜

光は花卉を赤紫に染めている

根元から輝く光に

小さな命が集まっていた

透明な羽がチラチラ、チラチラ

火の粉の飛ぶように

舞い上がっては、落ち

落ちては、飛び上がる

花卉は右往左往しながら落ちていく

根元から照る光に

小さな命が輝いていた

それが桜の精だった

惚れっぼい椿

惚れっぼいように一言の気遣いに
身を真っ赤に染める
歩幅を合わせてくれる気遣いに
頭をうなだれる
惚れっぼいように何でもない気遣いに
花びらをただ一枚だけ散らす
要らぬ意味づけをして裏切られて
ぼっくり首を墮として枯れた

ダルウイニー

世界には大きな壁がある
それはキャンバスであり、原稿用紙であり
それは戦場であり、畑である
各々が色を塗る
一人で運ぶバケツは重い
誰かと運ぶバケツはどうだ
私のバケツは取っ手が無いから
どれだけ辛いかわからない

世界には大きな壁がある
それは陣取りであり、博覧会である
誰かが誰かの絵筆を持つて
大きく大きく色を塗る
私は私の絵筆を持つて
腕いっぱい色を塗る
隣にいたかもしれない誰かを想って
ただひたすらに色を塗る

まだ見ぬ誰かへ
ここはダルウイニー
私は一人、色を塗る
まだ見ぬ誰かへ
ここはダルウイニー
私が果てようとも
きっと大きな絵が生まれるでしょう
まだ見ぬ誰かへ

蚊

手で虫を潰した
ティッシュで拭くとシミが残った
これは虫の生きた証
これは虫の墓標
これは虫の小さな抵抗
これは虫の大きな歴史
これは私の嫌悪の対象
これは私のささやかな満足
これは私の罪悪感
これは私の一部
そうしてこれは拭い去られた

花見

桜は通り過ぎていく
胸にぽっかり空いた穴の中を
風に乗って、一瞬のうちに、通り過ぎていく

残り香は示してくれる
自分が空っぽなことに

豪雪

桜花は若葉に変わりました

入梅

空の白さと葉の緑が目眩しく

窓の向こうを色鮮やかに車が駆けていく

百舌鳥と雀がカーテン越しに歌う

小学生の黄色い傘が揺れる

赤いリボンの高校生が走る

根を生やしたように日がな一日

入梅

ガタンガタンと悲鳴を上げる印刷機

積み重ねられた紙の束

皺の無いシャツを着た上司

メモに書かれた言葉のやり取り

ぬるくなつた紙コップ

寒い冷房が私の席に当たる

入梅